# 「小泉蘭斎墓碑」について

| 整理番号 | 題額 | 題額揮毫 | 碑記撰文 | 碑記揮毫 |
|---|---|---|---|---|
| 浦和一五 | 小泉蘭齋墓 | — | — | — |

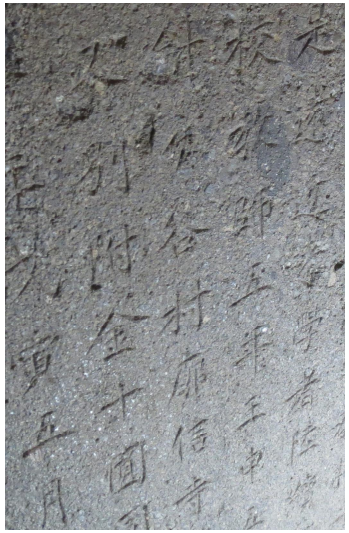
| 鐫刻 | 撰文建碑年 | 住所 | 場所 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| — | 一八七八・明治一一 | 北浦和 | 廓信寺 | |

## 一．はじめに

本墓碑は、幕末ごろに浦和で私塾を開き、明治に入って新しく作られた郷学校の教師をつとめた小泉蘭斎について、その弟子達が作った墓碑である。筆子塚の一種といってもよい。墓碑の撰述は、蘭齋没の六年後である。さいたま市指定文化財。

○写真１　墓碑正面

○写真２　題額



○写真３　背面「碑記」部分

## 二．翻刻並に訳注

■翻刻

◎題額

小泉蘭齋墓

◎碑記

蘭齋先生諱直人通稱明平小崎氏東京人為遠藤侯
藩士養於同邸小泉氏嘉永元年戊申十月辭藩寓於
武州足立郡別所村以漢學教授子弟旋移于浦和驛
尚加勉厲由是遠近來學者陸續不絶明治四年辛未
三月為小學校教師五年壬申五月十三日病卒於家
葬於足立郡針ヶ谷村廓信寺墻苑門人戮力各出貲
財以建墓碑又別附金十圓同寺以佗日為供香花之
價實明治十一年戊寅五月十三日也曰書其故摘其
梗概如此

＊囲み文字は、剥落や摩滅で今は判読が難しい文字。先行研究により補った。

＊異体字等

○京　京。　○養　養。　○足　足。　○所　所。　○於　於。　○葬　葬。

○曰　因。

■訳注

◎題額

小泉蘭齋墓

◎碑記

●本文（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

蘭齋先生、諱直人、通[*1]稱明平。小崎[*2]氏。東京人。
爲遠藤侯藩士、養於同邸小泉氏。
嘉永元年戊申十月、辭藩、寓於武州足立郡別所村、以漢學教授子弟。
旋移于浦和驛、尚加勉厲。
由是、遠近來學者、陸續不絶。
明治四年辛未三月、爲小學校教師。
五年壬申五月十三日、病、卒於家。
葬於足立郡針ヶ谷村廓信寺墻苑。
門人戮力各出貲財、以建墓碑。

又別附金十圓同寺、以佗日爲供香花之價。
實明治十一年戊寅五月十三日也。
因書其故、摘其梗概如此。

○校勘
＊1　「埼玉県教育史金石文集」は「通」、「浦和市文化財調査報告書」「浦和の石ぶみ」は「又」。幼名の場合「通称」とすることが多いので「通」とした。
＊2　「埼玉県教育史金石文集」は「崎」、「浦和市文化財調査報告書」「浦和の石ぶみ」は「泉」。現存石碑では「崎」と読める。

## ●訓訳

蘭齋先生、諱（いみな）は直人、通稱は明平なり。小崎氏。東京の人。
遠藤侯の藩士たりて、同邸の小泉氏に養たり。
嘉永元年戊申十月、藩を辭し、武州足立郡別所村に寓し、漢學を以て子弟に教授す。
浦和驛に旋移し、尚ほ勉厲を加ふ。
是より、遠近の來り學ぶ者、陸續として絶えず。
明治四年辛未三月、小學校教師となる。
五年壬申五月十三日、病み、家に卒（しゅつ）す。
足立郡針ヶ谷村廓信寺の墓苑に葬らる。
門人、力を戮（あは）せて各々貲財を出だし、以て墓碑を建つ。
又た別に金十圓を同寺に附し、佗日を以て香花を供するの價となす。
實に明治十一年戊寅五月十三日なり。
因りて其の故を書し、其の梗概を摘すること此（か）くの如し。

## ●人物

○小泉蘭齋　この墓碑の他には、与野鈴谷妙行寺にある稲垣田龍の墓碑を撰述したことくらいしか記録がない。田龍は、寛政元（一七八九）年から文久元（一八六一）年。豪農で、武術家、天文学研究者として知られる。蘭齋の墓碑の撰述は文久二（一八六二）年。蘭齋の生年について、『埼玉県教育史』「第二章寺子屋一覧」では「文化七年」とする。そこではデータは各市町村からの報告に基づくとするが、それ以降の浦和市さいたま市関連の資料では、生年不詳としている。現時点では、生年不詳とせざるを得ないが、仮に文化七年の生まれだとすると、藩を辞したのが、四十九歳、学校教師となったのが、七十一歳、没が七十二歳となる。

## ●注

○小崎氏　元の姓が小崎で、小泉氏の養子となり、小泉を名乗ったのであろう。
○遠藤侯　侯は、大名のこと。遠藤氏は、もと美濃郡上で二万七千石の譜代大名だったが、のちに近江三上に移封。四代藩主胤富（たねとみ）は寛政二（一七九〇）年に、五代藩主胤統（たねのり）は文化八（一八一一）年に、それぞれ家督相続している。小泉蘭齋が仕えていたのは、五代胤統の時代だろう。
○養　養子となる。

○同邸　熟語はないが、同舎と類義だろう。同じ家に住む。三上藩の江戸藩邸に居住していること。
○嘉永元年　西暦一八四八年。当時の遠藤藩主は五代胤統。
○辭藩　藩を辞去する、藩士をやめること。
○寓　寓居（仮住まい）を構える。
○武州足立郡別所村　現、さいたま市南区大字別所。
○浦和驛　中山道浦和宿。江戸日本橋から三番目の宿。
○勉厲　勉励。はげむ、力を尽くす。
○陸續　絶え間なく続くさま。
○明治四年　西暦一八七一年。
○小學校教師　小野文雄は、明治四年に開設されたのは郷学校であり、碑文で小学校とするのは誤りであるとする。昌平黌出身の石川直中が校長となり、蘭齋を含む近隣の寺子屋師匠たちが集められて教師となった。
○卒　享年を記さないので、蘭齋の生年は不詳。
○墓苑　墓地。
○佗日　別の日、後の日。墓碑建立後のしかるべき日。
○明治十一年　西暦一八七八年。

**●口語訳**（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

【出自等】

蘭齋先生、諱は直人、通称は明平である。姓は元小崎氏で、東京出身。

近江三上遠藤藩の藩士であったが、同藩邸の小泉氏の養子となった。

【藩を辞し武州へ移住して教授】

嘉永元年十月、遠藤藩から身を退き、野に降って、武州足立郡の別所村に寓居し、漢学塾を開いて子弟に教授した。

のち浦和駅に居を移し、さらに教育と研究に努めた。

これ以降、遠近から蘭齋のもとに来て学ぼうとするものが、絶え間なく続いた。

【郷学校教師就任】

明治四年三月、浦和県に郷学校が開かれると、そこの教師となった。

【逝去】

同五年五月十三日、病気になり、自宅で逝去した。

足立郡針ヶ谷村廓信寺の墓地に葬られた。

【墓碑建立の企て】

門人たちが、力を合わせてそれぞれ資金を拠出し、墓碑を建てることとなった。

またそれとは別に、金十円を廓信寺に寄附し、後日の香華料とした。

【記事】

墓碑建立は、明治十一年五月十三日のことである。

そこでこの間の経緯を碑文として撰述し、そのあらましをここに記す

## 三．資料

（一）「新編武蔵風土記稿」（文化三十（一八三〇）年脱稿）巻之一四三
◎針ヶ谷村：寺院
○廓信寺
「浄土宗、鴻巣宿勝願寺末、正覺山草樹院と號す、本尊は彌陀を安ぜり」
（二）「武蔵国郡村誌」（明治十五（一八八二）年脱稿）巻之八
◎針ヶ谷村：仏寺
○廓信寺
「竪六十五間一分五厘横三拾三間面積二千百六十九坪村の南方にあり」

## 四．主な参考資料

**①翻刻**

・『埼玉県教育史金石文集　上』（埼玉県教育委員会、一九六八）。
・小野文雄『浦和市文化財調査報告書30』（浦和市教育委員会、一九八六）。
・浦和市郷土文化会『浦和の石ぶみ』（さきたま出版会、一九八八）。

**②論文など**

・小島熙『浦和の今昔』（8庶民教育（4）寺子屋の指導者（イ）小泉蘭斎」（草土社、一九六七）。同「浦和の今昔（22）一．小泉蘭斎先生」『うらわ文化』第22号（一九六八）も同文。

以上

二〇二四年九月　薄井俊二訳す